「コトバ・言葉・language」

竹島理香　一ツ葉高校

「第一言語が英語であればどんなに良かっただろうか」ー日本語とは文法体系も語彙も完全に異なる英語を学ぶ人であれば誰しも一度はこの葛藤を感じたことはあるだろう。小学生から中学校卒業まで数年間をマレーシアという国で過ごした私はこの言葉の重みを実感してきた。

マレー系・中華系・インド系で構成された多民族国家であるマレーシアでは様々な言語が飛び交う一方で英語が準公用語として定められている。具体的には、各民族の人は家庭やカジュアルな場では彼らの母語を話し、仕事や学校、公共の場においては英語を使う。また、基本的には映画や本といった娯楽や街中の広告も英語であるため情報の入手においても英語は必須である。こうして、現地の人は日常的に言語と言語の間を行き来しているのだ。当時、日本語という一つの言語で生活が完結していた私にとっては衝撃的であったことを今でも鮮明に覚えている。このように、多民族・多言語社会の特質をもつマレーシアは 2023 年英語能力指数ランキングで 「高い英語能力」というカテゴリーに分類され、近年では経済成長も著しく物価も安い傾向にあるためリゾート地や語学留学先として注目を集めている。今よりも幼かった私は「マレーシアの人は自分の言語の他に英語も使いこなせて凄い！」と感じたが、後にこの認識が甘いということに気付かされた。

ある日、外で食事を取っていた時のことだった。小学生くらいの小柄な少女が一人で近づいて来た。不思議に思い事情を尋ねてみたが彼女は首を傾げるばかりで反応がなかった上に、何かを要求するように手を出していた。すると、何語かは特定できなかったが彼女の母語らしき言葉で話し始めた。私があたふたしていると、現地の人がこの少女は貧しさから学校に行けずに、街で物乞いをしてしのいでいるストリートチルドレンのような子供であると教えてくれたのだ。彼女はすぐに去ってしまい，何もできなかったことが心残りだった。後日、マレーシア人の先生にこの出来事を話すとこの国の痛ましい現状を教えてくれた。先生によると、少女は教育を受けられていないことから準公用語である英語が理解できずにいたためコミュニケーションが取れなかったそうだ。英語が学べなくてはこのような性質の国では満足に生活をすることも安定した仕事に就くことも叶わない。すなわち、負の連鎖を断ち切るチャンスが得られずにいるのと同様である。それだけでなく、他民族同士では主に英語を使って会話をすることが多いため、話す英語の熟練度で一瞬にして身分がわかってしまい深刻な差別に繋がってしまう。このような実態が他の英語を公用語とする多言語社会においても問題とされているのだ。例えば、フィリピンはこの問題の深刻さを表している。世界的に英語力が高い国であると評価され、マレーシアと同じくリ

ゾート地や留学先としてのイメージが強い国である一方、発展途上国としての問題を抱えている。また、ストリートチルドレンが多いことでも有名であり、教育が受けられないと限られた地域や民族間でしか話されない言語しか理解できず、「テレビの中のバービーが何を言っているのもわからずに成長する子供達」も多くいるとフィリピン人の先生から話を聞いた。私はこの現状を知り、胸が張り裂けそうな思いを抱いた。

日本人である私は生まれながらに日本語を学び、友達や家族と「コトバ」を交わした。そして新しい「言葉」と読み書きを学び、「language」で世界と繋がろうとしている。格差は食事や医療や教育に留まらず、人と人とを繋ぐ「コトバ」や世界を広げる「言葉」にも広がっており、第一言語が習得できることは当たり前のことではない。生まれながらに習得した「コトバ」で生活も仕事も教育も完結できる日本は「language」を見据えて世界に羽ばたくチャンスがある稀な国ではないか。今一度自身に問いかけてみてはどうだろうか。

参考資料
マレーシアの英語
―発音・文法・語彙の特徴―
https://www.kaisei.ac.jp/media/library/pdf/47_01_r_ono.pdf

なぜ行ったり来たりがうまいのか
――フィリピンの「ことば」を考えてみる
https://www.ide.go.jp/library/Japanese/Publish/Download/Overseas_report/pdf/1708_okabe.pdf
https://www.ganas.or.jp/フィリピン育ちでも「フィリピノ語が苦手」

世界英語能力指数ランキング 2023
https://www.efjapan.co.jp/epi/
https://sekai-hub.com/posts/english-proficiency-index-ranking-2023